

長期不登校経験のある中高生の心理的課題

— 認知・学習能力の背景にある内的体験と自己イメージ —

18001PCM 石本 真澄

I. 問題

1. 不登校研究の変遷

不登校についての研究は、Jonson, Falstein, Szurek, & Svendsen (1941) が非行傾向から「怠学(truancy)」するのとは異なり、神経症的症状をもって学校を欠席する症状を報告し、情緒障害として「学校恐怖(school phobia)」と名付けたことに始まる。そして、不登校に関する理解は時代とともに変化してきた。したがって、常にその時代の不登校の全体像を描くために事例や調査の積み重ねが必要である。

2. 現在の不登校と長期化問題

文部科学省(2019)によると、不登校である者の割合は2016年度から徐々に増加傾向にあり。中でも、不登校状態が前年度から継続している生徒は小・中学校では約半数いると報告されており不登校の長期化が問題となっている。

2. 長期化した不登校の背景病理

長期化した不登校の背景要因として杉山(2007)は①統合失調症を中心とする精神病、②スキゾイドパーソナリティ(SPDP)のlow functionを中心とするパーソナリティ障害(PD, ただし前思春期までは愛着障害)、③高機能自閉症(ASD)をベースとした対人関係の傷つきのフラッシュバックの三つを指摘している。特に②と③では、症状レベルで非常によく似ているため、鑑別診断が難しいとされている。

3. 不登校と認知能力・学習能力

八島(1992)は、症例検討から、学習障害児(LD児)の中でも高発達群に不登校などの出現率が高いことを報告している。

また、後藤(2012)は、愛着障害(AD)児を対象に認知特性の類型化を試み、AD児に認知能力のアンバランスさが見られることを示唆している。しかし、全体に共通する認知特性がみられ

ず、個別性が高いことが示唆された。したがって、本研究においては、認知特性と基礎学習能力を加味し、検討を行うことで認知特性を検討することとした。

4. 自己イメージから見た不登校の背景

木村・後藤(2012)によれば、自己イメージとは、自己の基盤となる様々な要素、まとまりと自身を取り巻く世界との距離や関係性、そのすべてを包括した概念である。簡単に言うと個人の体験そのもの、全てが自己イメージに集約されると定義している。

5. 不登校における内的体験過程

大久保(2013)は、人物画で理解できるASDとスキゾイドPDの体験内容は類似しており、ロールシャッハテストによる深い水準での内的体験内容・自己イメージをみた。ASDは自己感が新生自己感へ退行すると考えられる。SPDは中核自己感の揺らぎがみられることを示している。金子(2018)は、長期不登校中・高生の社会参加不安、ADの内的体験を明らかにした。①拡散型、②肥大型、③委縮型の3類型に分けた。

II. 目的

本研究は、長期不登校経験をもつ中高生の心理的課題を検索することを目的とし、研究1では、不登校生徒の認知特性や構造を合わせて、ウェクスラー知能検査とSTRAW-Rにより認知学習能力全般の特性を検討し類型化することを目的とする。研究2では、研究1の認知構造分類に基づいて、自己イメージを中心として、内的体験様式を検討する。

III. 方法

1. 調査協力校

不登校生徒の支援を長く続けているS学園。

2. 研究1の協力者

S学園の中学1年生から高校3年生21名

3.研究2の協力者

S学園の中学1年生から高校3年生19名

4.調査期間

2019年5月～10月に、心理検査を実施した。

5.実施した心理検査

(1)研究1

ASSQ,ウェクスラー式知能検査,STRAW-R。

(2)研究2

人物画, ロールシャッハ・テスト, 研究1で使用したデータ, S学園に保管されている資料。

IV. 研究1

(1)ASSQ結果

22点以上である事例C, F, J, Tの4名をASD圏とし, そのほかの17名をAD圏とする。

(2)ウェクスラー式知能検査結果

ウェクスラー式知能検査の結果, FSIQが79以下であったB, L, O知的ボーダーライン(BL)群とした。

また, PSI得点が89以下の者が43%と比較的多かったためPSI低群とした。

(3)STRAW-R結果

事例A, N, P, RのみRAN・流暢性において, 困難をきたさない数値とし, 流暢性高群とした。

(4)考察

研究1においては, 不登校生徒の認知特性と学習特性合わせ, ASD群, 知的BL群, PSI低群, 流暢性低群, 流暢性高群の5つに分類した。

V. 研究2

(1)結果

1.各群における内的体験内容と自己イメージ

ASD群事例C:強い刺激が加わると, 流されるものや輪郭のない顔反応が見られ, 自己解体の危機を体験し, 自己イメージを保つことが出来なくなっていると考えられる。

知的BL群事例B:口唇期欲求をめぐる両価性未分化でシルエットのみの人物画には表情もなく, 自己イメージの未確認な状態が表れてい

る。躁的防衛を一辺倒に使うことで防衛するが, 結果として情緒性の成長における悪循環が起きていると考えられる。

PSI低群事例D:棒人間を下方に小さく描いた。したがって, 防衛が強く, 自分を隠そうとする傾向にあると考えられる。

流暢性低群事例H:口唇期的快の否認という側面も一部見られ, 愛情欲求が裏切られるという内的体験をしていると考えられる。

流暢性高群事例P:統合不全により自己イメージが断片化していた。

(2)考察

①自己の誇大化

認知・学習能力において, 困難のある生徒に誇大化傾向を持つ生徒が複数人見られた。学習面における無力感, 欠損感の補償として, 誇大自己になっていることが考えられる。

②口唇欲求をめぐるジレンマ

内的体験内容から, 長期不登校経験のある生徒の多くが自己内に抱える両価性について意識を向けないようにしていたり, そもそも意識できないでいたりして自己イメージが拡散している事例が見られた。これは, 早期の母子関係の喪失体験によるものであり, 守られた場で自己表現をする経験が必要となるだろう。

VI. 総合考察

長期不登校生徒にも後藤(2011)における,AD児同様, 認知機能にばらつきがあることが示唆された。

また, 知的BL群やPSI得点や流暢性に困難を持つ生徒においては, 無力感や不全不安と言った負の感情を否認する傾向が見られ, 躁的防衛をしたり, 非現実的な誇大自己になったりする生徒がいるという特性が見られた。

両者とも, ネガティブな自己イメージを否認するための方法であると考えられるが, それゆえに現実感を失っていることが示唆され, 現実的な自己イメージを獲得するための学習支援を行うことが重要となるだろう。

今後も, 臨床現場で有用な知見となるように, 研究を深めていく必要があるだろう。